

## 第9話 産業および学問の発達

一方、幕府の権力の確立によって国内が統一し、天下が泰平になると共に、  
国内の交通が進歩し、産業および学問が大いに発達する。

### 元和偃武

内には朝廷を抑圧すると共に、巧みに大名を統御し、外には国を鎖して、諸外国に我が国風を乱されないようにしたので、江戸幕府の時代は、ともかくも永く泰平がつづいた。元和元年の大阪夏の陣に豊臣氏が亡びて後、凡そ250年の間に、幕府に兵を動かしたものとっては、ただ僅かに島原の乱のみでした。世に元和偃武（訳注 偃武：武器を伏せて用いぬこと）というのもそのためです。

### 五街道

こうして泰平がつづく、自然に国内の交通も進んで、産業もまた次第に発達した。

分けても幕府が江戸に開かれたので、京都と江戸との間の往来が頻繁になった外に、参勤交代の制度が出来て、諸大名の往来が繁くなったために、それらの領国と江戸との間の道路もいちじるしく整った。東海道、中山道、奥州街道、日光街道、甲州街道は、その中でも殊に主要なものでしたが、いづれも江戸の日本橋を起点として各地方に通じ、ところどころに宿場が設けられた。

大抵、道路の巾は5間（9m）で砂または小石を布き、両側に溝をつけて、松並木を植え、一里（4km）毎に一里塚を設けて榎を植えさせたものです。山は切り開いて、断崖には柵を設けたところもあつた。大部分は歩行で、乗り物としては駕籠か馬しかなかったような時代の道路としては、頗る進歩したものであつたといつても良いでしょう。



奥州街道の松並木

### 河川の交通

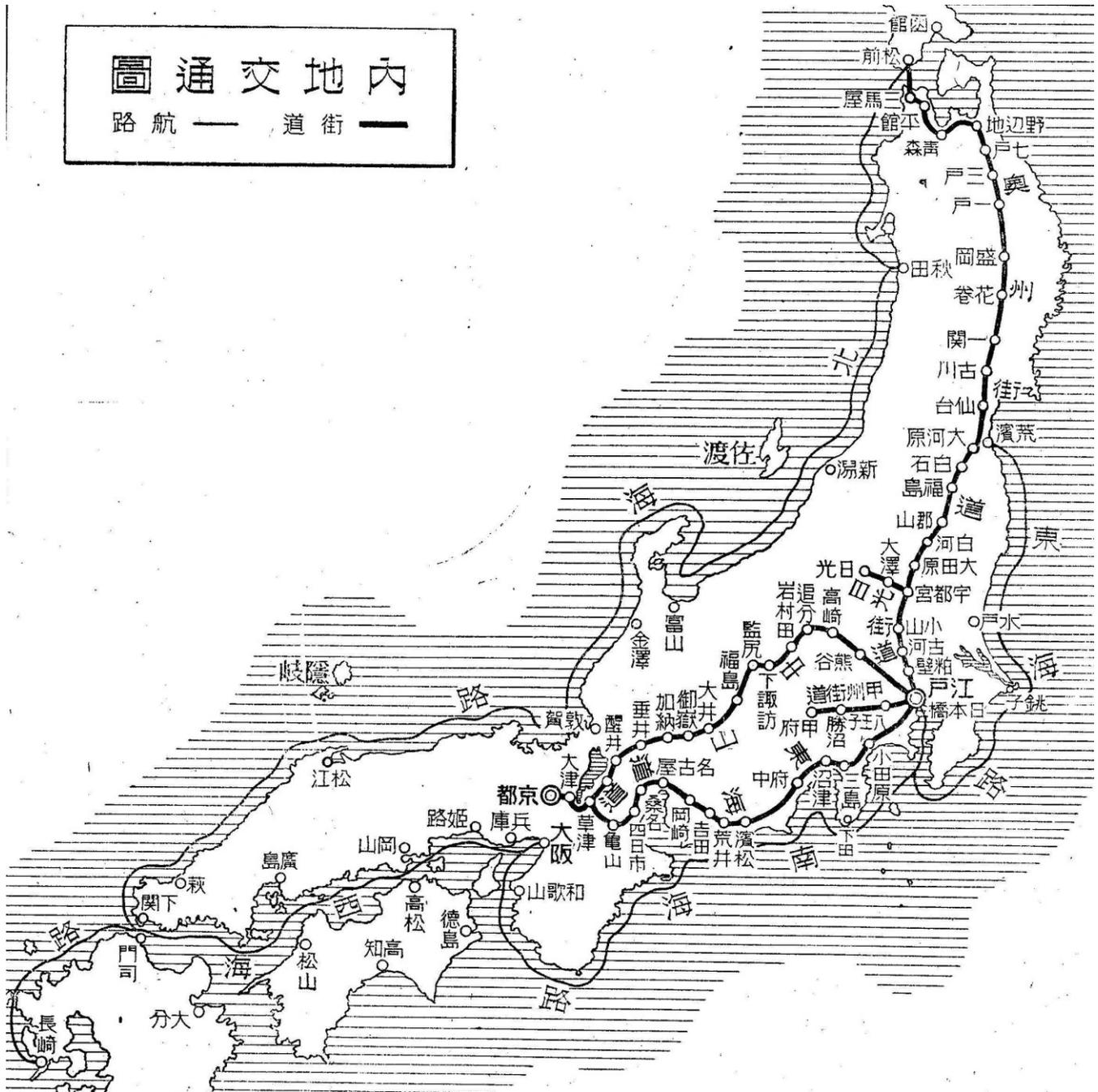
又、水上の交通は、当然、河川と海上に区別されるが、このうち河川の交通、即ち川舟として最も重要だつたのは、京都、大阪間の通路である淀川の通船です。伏見から大阪、伝法、尼崎に至る間を上下していた。荷船は二十石ないし二百五十石積みでしたが（一石は180リットル、二百五十石は45m<sup>3</sup>）、客船は大抵三十石積み（5.4m<sup>3</sup>）で、1日に2回づつ伏見から大阪に向つて出発した。下りは半日または半夜を要したが、上りは1日または1夜を費やした。江戸附近では、江戸川および利根川を利用して銚子に至る舟路が可なり早くから開けていた。

すみのくらしょうい  
角倉了以

次には、家康が大御所時代に、京都の豪商で貿易家の角倉了以が、早くすでに諸川を開削して、舟運の便を開いた功績を挙げなければならない。彼は慶長11年に保津川を切り開いて、山城から丹波に舟を通じたのを始めとして、同12年には駿河の富士川を開削し、同13年には遠江の天竜川を開削した。又、同16年には、山城の賀茂川を堰き分けて、別に三条から伏見まで高瀬川を通じた。そして、これらのいづれにも舟行の便を開いたのです。

内 地 交 通 圖

—— 街道 —— 航路 ——



えんがんこうろ  
沿岸航路

海路は、寛永の鎖国のために海外への渡航が禁じられてから、次第に近海の航路がさかんになった。そのころ、わが国の沿岸航路は、大体において四つに分かれていた。江戸・大阪間の南海路、大阪・長崎間の西海路、下関・松前間の北海路、および奥州・江戸間の東海路がそれです。このうち西海路は最も早く開けて、南海路も江戸の勃興につれて発達したが、東海路および北海路は風波の危険が多かった

## 第9話 産業および学問の発達

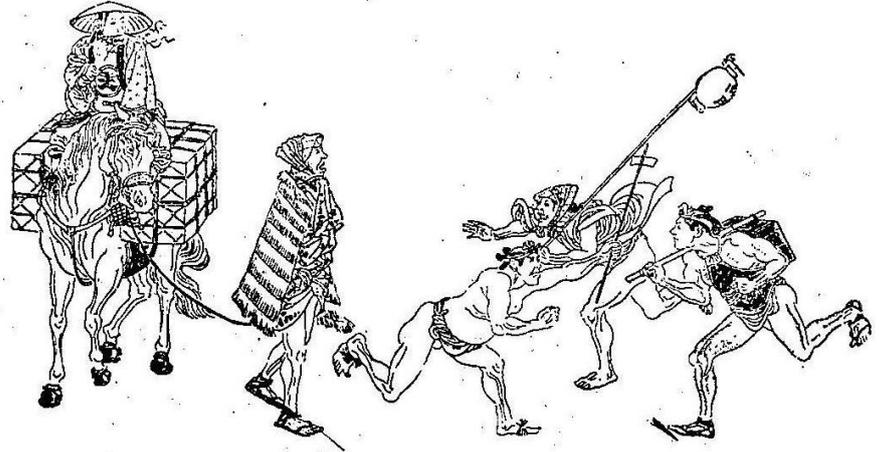
ので、<sup>はったつ</sup>ややその発達がおくっていた。

かわむらざいけん  
河村瑞賢

ところが、四代将軍家綱のころに、<sup>いえつな</sup>河村瑞賢が幕府の命を受けて、この両海路を安全にしてから、これらもまた <sup>いちじる</sup>著しく発達して、東北地方の産物を江戸に廻漕する途を開いた。 <sup>ずいけん</sup>瑞賢はまた淀川の下流に <sup>あちがわ</sup>安治川を掘って、<sup>ほ</sup>永く大阪の水害を除いたりした。

ひ きやく  
飛脚

こうして各地の産物が安全に <sup>うんゆ</sup>諸方に運輸されるようになると、ここに <sup>しょうぎょう</sup>商業もだんだん盛んになり、<sup>えんぽう</sup>遠方と <sup>つうしん</sup>通信する必要も起こったので、<sup>ひきやく</sup>飛脚を業とするものも出て来た。尤も、これはいわゆる町飛脚 <sup>もちつ</sup>として、幕府の公文書 <sup>こうぶんしょ</sup>を通送する <sup>ていそう</sup>継飛脚 <sup>つぎ</sup>と、大名が江戸の藩邸 <sup>はんてい</sup>と領国の間 <sup>ていそう</sup>を通信して <sup>だいみょうひきやく</sup>通送させた <sup>だいみょうひきやく</sup>大名飛脚とは、すでに前からあったのです。



ひ きやく  
飛脚

左の馬に乗っているのは東海道三度飛脚、  
中央は大急公用飛脚、右の2人は幕府の継飛脚。

なお、ついでに当時の飛脚の速さを言うと、大阪と江戸との間の普通便が8-9日で、至急便は5-6日でした。幕府の継飛脚は、大阪への普通便が4日でした。

さんぎょう はったつ  
産業の発達

こうして商業がだんだん盛んになって、取引が大規模に行われたりするようになると、今度はこれに <sup>しげき</sup>刺激されて、各種の産業が非常な <sup>いきお</sup>勢いで発達して来た。

<sup>こうぎょう</sup>鉱業、<sup>さんぎょう</sup>蚕業、<sup>きぬ</sup>絹、<sup>あさ</sup>麻、<sup>もめん</sup>木綿などの織物、それに伴っての <sup>おりもの</sup>染料、<sup>ともな</sup>陶磁器、<sup>そめもの</sup>漆器、<sup>とうじき</sup>蒔絵、<sup>しつき</sup>製紙なども盛んでした。 <sup>さか</sup>農産物は米を主として、ますます米田の増加をはかったので、新たに <sup>べいでん</sup>海岸を埋め立て <sup>ぞうか</sup>て新田を開くことなども <sup>あら</sup>諸方で行われた。

いえず がくもんしょうらい  
家康の学問奨励

さて、こうして世の中が平和に進むにつれて、学問、教育もまた興った。戦国時代以来、人々が武事のみを重んじたので、学問は非常に衰えて、僅かに諸大寺の坊さんたちがこれを講じただけに止まっていたが、家康は、「人のふみまもるべき道が明らかでないからこそ、世も乱れ国も治まらないのである。この道理を人にさとし、自らも知るためには、書物によらなければならない」と、国を治めるのに学問と教育の必要なのを悟って、これを復興しようとした。

<sup>かなざわぶんこ</sup>金沢文庫の書物をはじめ、民間の古書を集めて、この保存をはかり、あるいは京都の御所、院の御所、

## 第9話 産業および学問の発達

および公卿や社寺の文庫などのものを借り出して、書の巧みな坊さんたちに写させたり、或いは新たに活字を造って、足利学校の蔵書などをもととして、種々の書籍を出版させたりした。写させたものは、『古事記』、『六国史』、『続日本紀』などを始めとして非常に多かったが、出版されたものもまた、『六韜三略』、『武経七書』、『吾妻鑑』、『大蔵一覽集』のような軍書や国書や仏典の外に、『孔子家語』、『周易』、『群書治要』のような儒書またはそれに関するものが非常に多かった。

家康は文庫を江戸と駿府とに設けて、これらの書物をそれぞれに分けて蔵めた。江戸城内のは、初めは富士見亭文庫といったが、後、家光の時に名を紅葉山文庫と改めた。今の内閣文庫(国立公文書館)がそれで、明治以後、内閣の管理に移って今日に及んでいるのです。

### 林羅山

家康はまた文禄2年に始めて当時の名高い学者藤原惺窩を招いて、『貞観政要』という書物の講義をさせたが、その後、薨去の前年まで、学者の講義を聴くことを絶やさなかったといわれる。のみならず、彼は惺窩の門人林道春を用いて幕府の儒者とし、政治にもあづからせた。道春は号を羅山といい、そのころ、朱子学者として最も有名な一人でしたが、かの鐘銘事件の時に、家康の意を迎えて、無理に銘に難癖をつけたり、又、かの公家諸法度や、武家諸法度の草稿を作ったりしたというので、後世の人には一般によく言われません。けれども、彼が幕府の創始期につくした功労は決して少なくなかった上に、四代将軍家綱の時まで仕えて、幕府の学政をよくつかさどったので、その職を子孫が永く襲ぐ事となりました。



林羅山

### 綱吉の好学

さて、代々の将軍もまたよく家康の方針を承けて、学問をすすめたので、島原の乱後も、西洋の学問こそ全く伝わらなかったが、わが国の学問はますます発達した。殊に五代将軍綱吉は、幼少の時から学問を好んで、病気の時でも書物を手放さなかったと言われるほどでした。

林信篤(号を鳳岡という。道春の孫。春齋の子。)を召して、その教えを受けると共に、しばしば自ら儒書を講じて、諸大名および役人らに聴かせたのみならず、広く世間に学問を普及させるために、信篤に命じて、解り易く訓点を施した四書(大学、中庸、論語、孟子)および五経(易经、書経、詩経、礼記、春秋)を出版させた。道春点本(即ち、林道春が訓点を施した本)というのがそれで、これらの書物は遠く田舎にまで行渡ったので、自然と一般に読書の風が起り、大名、旗本は言うにおよばず、神官、僧侶、医者なども競って学問を修めるようになりました。

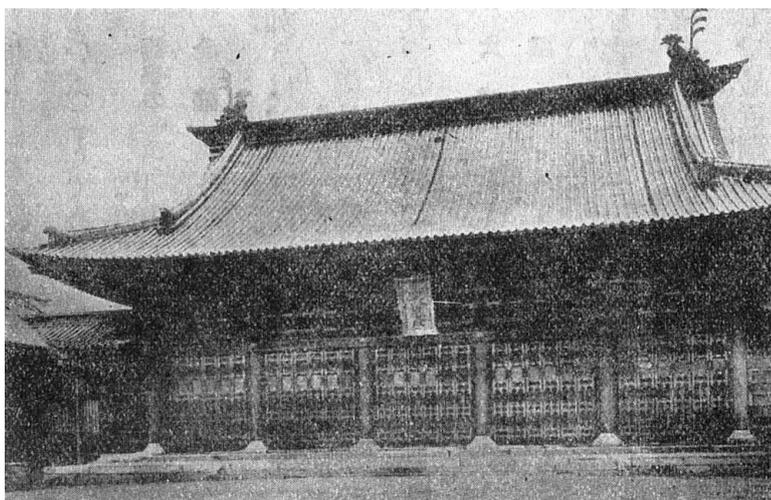
### 儒学の全盛

但し、ここに注意すべきは、そのころの学問というのが、概して儒教のことでしたということです。これは家康が、専ら仁義道徳を説く孔子の教えによって、世の中を平和に導くと共に、幕府の安全を図

ろうとしたからです。 そうして当時の学者は、一般に孔子を殊の外に尊ことんだが、わけても幕府の儒者で  
ある林家の如きは、その邸内に孔子の廟びょうを建てて、その像を祀ぞうっていたほどです。

ゆしま せいどう  
湯島の聖堂

この林家の邸やしきは、従ってまたその廟  
は、初め上野の忍岡うえの しのみがおか（今の上野公園の  
内）に在ったが、元禄3年、綱吉は特  
に信篤のぶあつに命じて、これを本郷の湯島ほんごう ゆしまに移  
させることにした。 建築の出来上がった  
のは翌4年でした。



東京 文京区 湯島聖堂大成殿（寛政11年再建）

その廟は、これまで先聖殿せんせい殿といっ  
たのですが、綱吉はこれを改めて大成

殿でんと名付け、自らその3字を書いた額がくを掲げさせた。 すなわち有名な湯島の聖堂ゆしま せいどうがこれです。

その後、しばしば火災かかに罹さいけんって再建したが、その最後に罹かんとうだいしんさいったのは大正12年9月1日の関東大震災  
の時ようやでして、最近漸くまた再建した。 場所は、今の中央線の御茶ノ水駅のすぐ向いに当る。 今度、駅  
のそばに新たに架けられた聖橋か ひじりばしは、すなわち聖堂の前ちなにあるので、それに因んで名づけられたのです。

じゆしゃ ちくはつ  
儒者の蓄髪

さて大成殿が出来ると、綱吉は、これまで学者が坊さん姿で、法印ほういん、法眼ほうげん、法橋ほうきょうなどという坊さん  
の官かんに任ぜられていたのを改め、今後はことごと 悉かみく髪たくわを蓄そうせいえさせることにして、第1に先づ奏請して、林  
信篤のぶあつを従五位下じゆに叙げし、大学頭だいがくのかみに任じた。 そして彼に、聖堂を管理させて、孔子の祭典さいてんをつかさどら  
せると共に、その私塾しじゆくを大成殿の傍かたわらに移して、これを聖堂学問所ようせいと名づけて学生を養成させた。 林  
氏はこれがもとで、その後、代々大学頭だいがくのかみに任ぜられて幕府の学問の事をつかさどることとなったが、又、  
この学問所も、後に幕府の学校である昌平校しやうへいこうとなって、ながく幕府の教学きやうがくの中心となった。

このように、幕府が代々学問を奨励しょうれいしたので、諸大名の間にも  
も学者を招いて政治上の顧問こもんとしたり、領内に学問を弘めたりす  
ることが次第に行われたが、中でも殊に著名な大名は尾張の徳川  
義直よしなお、備前の池田光政いけだみつまさ、会津の保科正之あいづ ほしなまさゆき、水戸の徳川光圀とくがわみつくに、加賀  
の前田綱紀まえだつなりのらでした。

なかえとうじゆ  
中江藤樹

儒者では、道春どうしゆんと同じころに近江に中江藤樹なおみ なかえとうじゆがいた。 若い  
時に伊予の大洲藩いよ おおすはんに仕えていたが、非常おやこうこうに親孝行の人でしたので、  
老母ろうぼをひとり故郷こきやうに留めておくのをひどく済まなく思とどって、職を



なかえとうじゆ  
中江藤樹

やめて帰り、母に孝行をつくすかたわら、私塾を開いて門人を教えた。 藤樹とうじゆの唱となえた教えは、同じ儒

## 第9話 産業および学問の発達

教のうちでも、**道春**らの奉じた**朱子学**とはちがった**陽明学**で、もっぱら実際に身に行うことに重きを置いた。それで、**藤樹**は学問も深かったが、殊に徳行を以って人を率いたので、その地方のものは皆その徳になつて、ついには道に落ちた物をも拾わず、夜も戸を締めないで寝るようになった。世に**藤樹**を尊んで**近江聖人**といっている。慶安元年 8 月に 41 才を以って没した。

### 熊沢蕃山

その門人のうちで最もすぐれていたのは、**熊沢蕃山**です。彼は博学でした上に**経済**の才にも長じていた。岡山藩主**池田光政**に仕えて重用され、水利を修め、産業を興して、大いに治績をあげた。**光政**が**保科正之**、**徳川光圀**と共に天下の 3 名君といわれたのも、一つは蕃山の補佐の功によるところが少なくなかったと言われます。40 才の時に仕いを辞して京都にのぼり、講筵を開いて子弟を教えた。

ところが、一般士民の外に、公卿らが来て学ぶ者も少なくなかったのみならず、その教えのうちに幕府の官学である**朱子学**と相反したところが頗る多かったので、京都所司代に疑われて京都を追われた。そこで、名を蕃山**了介**と改めて、しばらく**吉野**に閑居したが、ついで幕府の命によって**播州明石**の城主**松平信之**に預けられた。

その後、**信之**の移封と共に大和の郡山に移り、更にまた下総の古河に赴いた。蕃山は**貞享 4 年**、書を**将軍綱吉**にたてまつって幕府の政治を論じたために、却って罰せられて幽閉され、その後 4 年にして遂に卒した。時は**元禄 4 年 8 月**、年は 73 才でした。

この蕃山と殆ど時を同じくして出た諸学者には、**山崎闇斎**、**木下順庵**、**山鹿素行**、**伊藤仁斎**、**貝原益軒**らがいました。

### 山崎闇斎

**山崎闇斎**は初め京都の寺に入って坊さんになったが、後、土佐で**朱子学**を学んで、還俗して京都に帰って、塾を開いて門弟を教えた。しかし、**朱子学**だけに固まらずに、後また大いに我が古神道を研究して、これを以って儒学の足らないところを補おうとしたのみならず、ついには神道の一派をすら始めた。彼が我が国体を尊んで、わが国を政治上、且つ**道徳**上から統一するには、**キリスト**の教えは勿論、**孔孟**の教えもまた不適當で、どうしても神道によらなければならないとしたところは、その頃の学者としては実に卓見というべきでした。

48 才の時に、会津の藩主**保科正之**に招聘されてその師となり、厚く信任されたので、いわゆる闇斎学はその地方に大いに弘まったが、**正之**が卒した後はまた京都に帰って門弟を教えた。公卿、大名以下で教えを請うものが 6,000 人にのぼったと称される。中でも最も傑出したのは、**浅見綱斎**、**佐藤剛斎**、**三宅尚斎**の 3 人で、これを崎門の三傑といった。

### 木下順庵

**木下順庵**は**藤原惺窩**の門人**松永尺五**の弟子です。やはり**朱子学**を奉じて、京都の東山に屏居して門弟をおしえること 20 余年に及んだ。学徳共に高く、詩文にも長じていた。加賀の藩主**前田綱紀**に

## 第9話 産業および学問の発達

へい つなよし こうでい  
聘され、後、将軍綱吉に召されて幕府に仕えた。彼は朱子を尊んだが、必ずしもこれに拘泥せずに、門  
人らにおのおのその長所を発揮させるに努めたので、その門からは非常に多くの人物が輩出した。中  
あら いはくせき むろきゆうそう あめのもりほうしゅう ぎ おんなんかい さかきばらこうしゅう ぼくもん  
でも新井白石、室鳩巢、雨森芳州、祇園南海、榊原篁州の5人は木門の5先生と称された。

### やまが そこう 山鹿素行

やまが そこう かんか あこうぎし こと はやしどうしゅん  
山鹿素行はその感化を有名な赤穂義士に及ぼしたので殊に聞こえている。初め林道春に儒学を学  
んで朱子学を奉じ、ついで小幡景憲に軍学を学んでその奥義を極めた。後、更に歌学、故実、神道を  
おぼたかげのり おくぎ きわ かがく こじつ しんどう  
学び、また、老荘の学および仏教の経文をも研究して、そのころのあらゆる学問に通達した。このた  
め諸大名以下で教を請うものが非常に多く、召抱えようとした者も多かったが、とりわけ、彼の人格お  
よび力量に敬服して、彼に最も恭敬をつくした赤穂の藩主浅野長直（長矩の祖父）の聘に応じて、千石  
けいふく さいこうけい あさのながなお ながのり へい おう ごく  
の禄と賓師の礼をもって厚遇された。居ること9年、39才の時に辞して江戸に帰って、学問および兵法  
ろく ひんし れい こうぐう い じ へいほう  
を教えた。この時、彼の名声はますます高く、忽ちにして門弟が2,000余人にのぼり、小大名などは迎  
も及ばぬ勢力になった。

ところが、この頃から、彼は朱子学に疑いを生じ、後にはこれを斥けて、別に自家の意見を立て  
たために、一つは浪人の兵学者として勢力のあることも、幕府の忌むところとなって、ついに江戸から放逐  
らうにん ほうちく  
されて、赤穂の浅野家に預けられた。寛文6年10月のことで、素行が45才の時でした。これより10  
あづ そこう  
年、彼は赤穂に在って、浅野家の優遇を受けたが、延宝3年に許されて江戸に帰り、その後は専ら軍学山  
もつば ぐんがくやま  
鹿流を多くの門人に教えた。亡くなったのは、貞享2年で、年は64才でした。

彼の著書の一つに『中朝事実』というのがありますが、これは素行が我が上代の歴史によって、尊厳  
ちゆうちようじじつ そこう じょうだい そんげん  
なる我が国体が万国に優れて、忠孝こそ建国以来の大道であることを明かしたもので、後世、尊王心の  
こくたい ばんこく すぐ ちゆうこう たいどう こうせい そんのうしん  
鼓吹に大いに力を与えた書物です。なお、素行の感化を受けたものとしては、赤穂義士の外に、幕末の吉田  
こすい そこう よしだ  
しょういん のぎたいしやう かぞ  
松陰、明治の乃木大将などもその人々であると数えられています。

### いとうじんさい 伊藤仁斎

そこう いただ がくふう  
素行と同じ疑いを朱子学に抱いて、そこから更に新しい学風  
おこ いとうじんさい じんさい よう  
を興した者は伊藤仁斎です。仁斎は京都の人で、幼より学を好  
もつば こうもう むね  
み、はじめは専ら朱子学に熱中したが、後に朱子の説が孔孟の旨  
に違っている事の多いのを見て、多年研究を重ねた末に、ついに  
かさ  
古学を唱えて、直接に孔孟の本意に達しようとした。

がく こう ひさ じんかく きわ  
彼は学を講ずること40年の久しきに及び、その人格の極め  
えんまん がくとく した  
て円満なのが世に聞こえた。それでその学徳を慕って、諸国か  
ひだ  
ら来て学ぶ者が2,000余人にのぼり、門弟のいない国は飛騨、  
さど いき  
佐渡、壱岐などの2,3に過ぎなかったといわれる。宝永2年3月に、79才をもって没した。

じんさい とうがい かがく つ かせい  
仁斎の子の東涯もまた聞こえた学者でして、よく家学を継いで多くの門弟を教え、ますます家聲を高



いとうじんさい  
伊藤仁斎

めた。

おぎう そらい  
荻生徂徠

この東涯と同じところに、江戸に在って盛んに儒生をおしえたものは  
荻生徂徠です。本姓が物部でしたので、これを略して物徂徠ともい  
った。幼時から苦学して、初めは朱子学を講じていたが、後、これを捨  
てると共に、仁齋の古学をも攻撃して、自分は新たに復古学を唱えて、  
古文辞をもって古の経書を学ぶ階梯とした。儒教の本領は、礼学  
をもって民を治める政治にある、というのが彼の主張でした。頗る博  
学で、自ら海内第一の人物をもって任じて、「我が學術の如きは



おぎゅう そらい  
荻生徂徠

神武天皇以来それ幾人あるか」とまで豪語していました。太宰春台、服部南郭、安藤東野、山縣周南  
らは、数多の門弟の中でも殊にすぐれた人々でした。

かいばらえきけん  
貝原益軒

また、仁齋と同じところに貝原益軒がいました。筑前福岡の人で、篤学の誉れが高かった。山崎闇  
齋、木下順庵らの門にも出入して、もっぱら朱子学を学び、その見識も中々高かったが、人物が極めて恭  
謙で、少しも人に誇るようなことがなかった。

終生つとめて書を読み、道を思って怠らず、自ら民衆の教化を任として、  
85才で正徳4年に世を去るまで、世のためになる多くの書物を著した。

しかもそれを、一般の儒者が頻りに拮据な漢文で書いたのとは反対に、  
平易な仮名交じり文で書いて、世間の者に読み易くした。益軒十訓の如き  
は今もなお持て囃されて、大いに世に益しています。



かいばらえきけん  
貝原益軒

( 第9話 産業および学問の発達 終わり。 次は前頁に戻り、第10話 徳川光圀と大日本史 )